

ジャンルを超えた共通性（2） —デフォー作品における政治・歴史・文学—

干 井 洋 一

I

本稿を含む一連の論考では、政治小冊子と小説という異なるジャンルを対象に、デフォー作品がもつ共通点について考察していく。デフォーの政治小冊子3作品と、女性を主人公にした2つの小説を取り上げ、①特殊な語り手の設定、②アイロニーの効果、③歴史的事実の用い方という3つの観点から、デフォー作品がもつ特徴について論じる。本稿では第1冊子である『ハノーヴァー家の王位継承に反対する理由』（*Reasons against the Succession of the House of Hanover*）を引き続き分析していくが¹⁾、その前に本作品を理解するうえで不可欠な、当時の最大の懸案であった王位継承問題に触れておきたい。

名誉革命により王位に就いたウィリアム3世には世継ぎがなく、義妹であるアンが女王となった後は、アンと夫ジョージの間に生まれた子が、アン女王の後を継いで次代の王となることが期待されていた。しかしながら、アンとジョージとの間に生まれた子は不運にも全員が他界してしまった。そのため、血統のみで判断するならば、名誉革命により王位を追われたジェームズ2世の息子であり、アンの異母弟でもあるジェームズ「老僭王」（Old Pretender）が王位を継ぐ可能性が出てきたのである。

しかしながら、フランスの庇護のもとカトリック教を奉じている老僭王が英国の王位を継ぐならば、1688年の名誉革命自体が否定され、また英国国教会も存続の危機にさらされることになる。そのため、老僭王の即位を阻むべく、1701年に「王位継承法」（Act of Settlement）が制定された。英国の王位継承

者はプロテスタントでなければならないという条件が課された、この法律に則れば僭王ジェームズは英国王にはなれず、ハノーヴァー選帝侯ジョージが王位を継ぐはずであった。(本稿ではドイツ語発音のハノーファーではなく、一貫してハノーヴァーを用いることとする。)

後の時代から見ると僭王ジェームズの即位を阻む手立ては十二分に講じられていると思われがちだが、当時の政治情勢は非常に流動的なものであった。一例を挙げると、当時政権を担当していた、ロバート・ハーレーが率いるトーリー党はホイッグ党とは異なり、ジェームズ2世の血統を継ぐ、アン女王の異母弟である僭王ジェームズに対し同情的な姿勢をとっていた。一方、ハーレーの前に、アン女王の信任を得ていたホイッグ党はフランス王ルイ14世の庇護下にある僭王ジェームズを断固として拒否する姿勢をとっていた。

当時の不穏な状況についてファーバンクは次のように述べている。

A Tory ministry led by Robert Harley had by this time been in power for some three years, and rumours were rife that, though it still paid lip-service to the Act of Settlement and the Hanoverian succession, it [=a Tory ministry] was intending a sell-out to France, with whom in secret it had for some time been in friendly relations, and to the Pretender. The danger seemed all the more real in that it was known that Queen Anne, no friend to the Hanoverians, would in her heart had preferred her Stuart brother to succeed. Thus it was becoming an urgent question whether, if the Queen were to die, the Act of Settlement would in fact be upheld. (29-30) (emphasis added)²⁾

ハーレー内閣は「王位継承法」(Act of Settlement)と、「ハノーヴァー選帝侯ジョージの王位継承」(the Hanoverian succession)に上辺は賛成のふりをしているもの、実際は「英国を裏切り、フランスおよび老僭王ジェームズと通じているという噂」が盛んに飛び交っていた。この噂は全く根拠がないとはいえ

ず、トーリー党を率いていたハーリーは、同党内のライバルであったボーリングブルック子爵が僭王ジェームズを強く支持するのを阻止することができず、王位継承問題で何方つかずの曖昧な態度をとっていた。

また引用の後半部でファーバンクが指摘しているように、「アン女王自身も内心ではハノーヴァー選定侯よりも、異母弟ジェームズ（her Stuart brother）に王位を継いでもらいたいと考えている」ことが周りに知られるようになると、王位継承をめぐる混迷はさらに深まっていった。

アン女王が崩御した後に、カトリック教徒である僭王ジェームズが王位に就くことは王位継承法で阻止されるはずであった。しかしながら上述したように、当時の状況は予断を許さず、フランスの庇護下にあるジェームズが次の英国王となる可能性は消えていなかったといえるだろう。デフォーはこの王位継承という当時の大問題に対し、一貫してハノーヴァー家による王位継承を支持していたが、英国内には、名誉革命によって追放されたジェームズ２世の息子である僭主（Pretender）を王位につけようとする動きも根強く残っていた。このジェームズ支持派は、名誉革命以降も「引き続きジェームズ２世とその直系の子孫を正統な君主として支持した人々」であり、「ジェームズのラテン語形 Jacobus にちなみジャコバイト」³⁾（Jacobite）と呼ばれていた。

僭主ジェームズが即位し名誉革命以降の体制を覆す可能性が存在する以上、ウィリアム３世を理想の王と称えていたデフォーが僭王ジェームズの即位を何としても阻止したいと考えたのは自然な成り行きであった。当時の状況について『デフォー伝』を著したジェームズ・サザランド（James Sutherland）は「プロテスタントによる王位継承は法で確定しているのに、なぜ人々はあれほど神経質になっていたのだろうか」⁴⁾と疑問を呈している。しかし、マクシミリアン・Ｅ・ノヴァク（Maximilian E. Novak）が指摘しているように、サザランドの解釈は王位継承問題の結末を知っているものが抱く解釈であり、当時の不安定な情勢を的確に把握しているとはいえないだろう。ノヴァクは次のように述べている。

Hindsight may suggest that the Jacobites never had a chance, but throughout most of the eighteenth century the Whigs live in continual fear of a successful counter-revolution by the Jacobites. . . . William had to dodge three attempts at assassination during his reign. For someone like Defoe, who grew up with the terror of the possible eradication of Protestantism by Louis XIV, confidence in the permanence of the Glorious Revolution was impossible. (104) (emphasis added)⁵⁾

ノヴァクは「ジャコバイト派が勝つ見込みはなかったと、後の時代からは見えるだろう」と述べるとともに、ホイッグ派が18世紀のほぼ全期間を通して「名誉革命の成果が否定されるかもしれないという絶えざる不安」を抱いていたことに触れている。さらにノヴァクは、ウィリアム3世が「三度も暗殺の危機」に晒されたという事実をその具体例として挙げている。そして「ルイ14世の介入により、英国における新教主義が根絶やしにされるかもしれないという恐怖のもとで育ったデフォー」にとっては、ルイ14世の後ろ盾を得て、フランスで英国の王位を継ぐ機会を窺っている僭王ジェームズは警戒を怠ることができない存在であった。ノヴァクが述べているように、ジャコバイト派によって「名誉革命が否定されることはないという確信」をデフォーは持つことができなかったのである。

II

デフォーが最初にニューゲートに投獄されたのは1703年である。前年に出した『非国教徒捷徑』(*The Shortest Way with the Dissenters*)をめぐる筆禍事件によって、彼はニューゲート獄に入れられたのであった。それから十年が経ち、デフォーはまたしても危険な政治論争に自ら身を投じ、最終的には再びニューゲートに投獄されてしまう。もしデフォーが1702年の筆禍事件に懲り、王位継承問題から身を引いておくことができたならば、不幸な結果はもたらされなかっただろう。しかし、自らが信奉するウィリアム3世が打ち立てた政治体

制を守るため、デフォーは自身が持つ世論への影響力を今こそ揮う必要があると考えたのであろう。

サザランドは王位継承問題に対するデフォーの姿勢を次のように語っている。

If Defoe was now prepared, after almost ten years of political work behind the scenes, to compromise on almost every political principles that he had ever held, there was one about which he never wavered to the slightest degree: he was a determined upholder of the Protestant succession [the Hanoverian succession]. So firmly did he believe in it, indeed, that the merest suggestion of bringing back the exiled Stuarts [the Old Pretender] horrified him. The return of the Stuarts meant to a man like Defoe reaction, prosecution, and commercial disaster. All that had been gained under that best of monarchs, King William, would be thrown away . . . (192-3) (emphasis added)⁶⁾

ホイッグとトーリー両派に仕えたことにより変節を疑われるデフォーではあったが、「選帝侯ジョージが王位を継ぐべきであるという点」に関しては、デフォーの信念は「決して揺らぐことはなかった」とサザランドは述べている。デフォーにとってウィリアム３世は理想の王であり、万一僭王ジェームズが王位に就くようなことがあれば、「最も偉大な王であるウィリアム３世のもとで英国が築き上げたすべてが打ち捨てられてしまう」とデフォーは危惧していたのである。

一方、ノヴァクはサザランドとは異なる解釈も付け加えている。1713年に、筆禍事件を招きかねない政治小冊子を立て続けに出すというデフォーの無謀な行動は彼の性格を反映したのもであるとノヴァクは考えている。自らの政治信条ゆえにデフォーが行動したという面もあるものの、「政治諷刺の絶好の機会が与えられている以上、デフォーは政治論争に首を突っ込まずにはおれなか

った」⁷⁾とノヴァクは評している。

1713年の2月から4月にかけて、デフォーはひと月ごとに3つの政治小冊子を出した。1.『ハノーヴァー家の王位継承に反対する理由』(*Reasons against the Succession of the House of Hanover*, 1713), 2.『僭王が王位に就くとどうなるか? または僭王が英国王位に就くことによって生じる利点と実際に起きる結果に関する諸考察』(*And What if the Pretender should Come? Or some Considerations of the Advantages and real Consequences of the Pretender's Possessing the Crown of Great Britain*, 1713), 3.『誰も考えようとしなかった問い, すなわち女王が亡くなるとどうなるのかという問いへの答え』(*An Answer to a Question That No Body thinks of, viz. What if the Queen should die?*, 1713) の3冊子である。

11年前に出した『非国教徒捷徑』と同様に、デフォーはこれら3作品も匿名で出版している。しかし匿名で出したとはいえ、彼がつけた3つの題名は余りに挑発的なものであった。第1冊子の題名である「ハノーヴァー家の王位継承に反対する理由」はプロテスタントの王を望む人々にとって衝撃的なものであり、一方、王位継承法を敵視するジャコバイト派にとっては自派を勇気づける題名であった。僭王ジェームズ支持派は喜び勇んで第1冊子を買求めたことであろう。もっとも次稿以降で述べるように、この第1冊子の内容と題名とは一致しておらず、デフォーがジャコバイト派を説得して、ハノーヴァー派に鞍替えさせることを狙った作品となっている。

また第2冊子の題名である「僭王が王位に就くとどうなるか? または僭王が英国王位に就くことによって生じる利点と実際に起きる結果に関する諸考察」も、僭王ジェームズが即位した場合の「利点」を強調しており、題名だけを見た読者は、この第2冊子の作者はフランスの庇護下にある僭王ジェームズを支持していると考えられるであろう。しかし、この第2冊子の場合も第1冊子と同じく、作品内容と題名とが一致していないのである。

さらに第3冊子の題名である「誰も考えようとしなかった問い, すなわち女王が亡くなるとどうなるのかという問いへの答え」も同じく物議を醸す題名で

あった。というのも女王の死を話題にすること自体が女王への敬意を欠くものであり、さらに出版当時アン女王が健康を害していたことを考えると、不敬の度合いはさらに高まっているといえるだろう。また女王の死を表す言葉が「崩御する」(demise)ではなく「死ぬ」(die)という表現であることも人々の批判を招くものであった。

Ⅲ

デフォーが最初の筆禍事件に巻き込まれる原因となった『非国教徒捷徑』は、イアン・ワット (Ian Watt) を始め、多くの研究者たちが論じてきた。一方『ハノーヴァー家の王位継承に反対する理由』(以下では『王位継承に反対する理由』と略す) に始まる３作品の方は、デフォーの２度目のニューゲート投獄を引き起こす原因となった作品なので、主要なデフォー伝の中で簡単に触れられてはいるものの、本格的な研究はなされていない。後者の３作品に関しては、デフォーの真意が読者にきちんと伝わったかどうかというアイロニーの問題が短く論じられてきたに過ぎなかった。

20世紀の終りから21世紀初頭にかけて、デフォーについての本格的な伝記が３冊出ており、以下ではこれらの３研究を紹介する。まずポーラ・バックシャイダー (Paula Backscheider) は *Daniel Defoe: His Life* (1989) において、「『王位継承に反対する理由』は「『非国教徒捷徑』と異なり、国教会高教会派の言葉遣いを真似ようとは試みておらず」⁸⁾ 本作品におけるアイロニーは誰の目にも明らかだと評している。ノヴァクも同様に *Daniel Defoe: Master of Fictions* (2003) の中で、「『王位継承に反対する理由』という題名はハノーヴァー家の王位継承に反対するように見せかけてはいるが、少し作品を読み進めるならば、実際には反対派のジャコバイトを嘲笑することを目的としたアイロニカルな作品であることは明白だ」⁹⁾ と述べている。

一方、*The Life of Daniel Defoe: A Critical Biography* (2005) を著したジョン・リケッティ (John Richetti) は上述の二人とは異なり、デフォーの３作品をある程度丁寧に論じている。『王位継承に反対する理由』に関するリケッ

ティの議論で、最も注目に値するのは次の2点である。1. バックシャイダーとノヴァクが『非国教徒捷徑』と比較しつつアイロニーの有無に議論の焦点を絞っているのに対し、リケッティはアイロニーだけでなく帰謬法も用いられていると述べている。2. 『王位継承に反対する理由』はアイロニカルな作品であると単純には断定できない。逆にデフォーは、自らが反対している「ジャコバイト派の主張に力を与えず、一定程度の妥当性を付与してしまう傾向がある」¹⁰⁾とリケッティは述べている。

作者デフォーが創り出した語り手が、作者のコントロールを離れて、大いに活躍してしまうため、全体的効果が損なわれてしまうというリケッティの議論は非常に興味深い。というのも、リケッティの指摘は、伝統的なデフォー観、つまり自らの持論とは相容れない反対派も含め、あらゆる人物に成りきり、変幻自在な語り手として筆を揮うことができる作家というデフォー観につながるからである。

デフォーが最も得意とする手法（あらゆる人物に成りきる手法）に関して、サザランドは次のように説明している。

It is worth noticing, too, that in *The Shortest Way* Defoe had already perfected a technique which was to serve him again and again when he took to writing his fictitious narratives late in life: the technique of putting himself in someone else's shoes and proceeding to write consistently from that person's point of view. . . . That, at any rate, was Defoe's habitual method of writing prose fiction; it is a developed form of 'make-believe'. (11) (emphasis added)¹¹⁾

「自分以外の他の誰かに成りきり、その人物の視点から一貫して語り続ける」という、デフォーが得意とした手法をサザランドは、「設定した人物に成りきる」（‘make-believe’）手法と名づけており、デフォーはその小説群で、この手法を常用していると述べている。

デフォーの小説群だけでなく、本論文で扱っている1713年出版の3作品においても、デフォーは「設定した人物に成りきる」という手法を用いている。これら3作品は同年2月からひと月ごとに3回連続という短期間に出版されているが、最も注目に値することは、デフォーが作品ごとに、全く異なるタイプの語り手を設定していることである。

以下では3作品の冒頭部分を比較することによって、3人の語り手が用いている語彙レベル・英文構造・語りのトーンがそれぞれ相異なることを示す。なお3人の語り手が主張している内容や論理展開などを含めた上での、語り手に対する総合的評価は次稿以降で行うこととする。

まず1番目の作品である『王位継承に反対する理由』の冒頭部分を引用する。

What Strife is here among you all? And what a Noise about who shall or shall not be King, the *Lord knows when*? Is it not a strange thing we cannot be quiet with the Queen we have, but we must all fall into Confusion and Combustions about who shall come after? (167) (emphasis added)¹²⁾

冒頭の3文の語数はそれぞれ7語、16語、29語となっている。3つとも疑問文であり、読者に対し問いを重ねることで、読者の注意を引こうとしている点が特徴的である。また最初の2文は非常に短くかつ平易な英文となっており、第1文で最も長い語がStrifeで6文字、第2文で最も長い語はNoise等の5文字となっており、いずれも単文である。3番目の文は、疑問文と平叙文をつなげた重文となり、文の後半部に初めて、頭韻を用いた技巧的な表現が現れる(Confusion and Combustions「混乱と騒動」)。冒頭部分を構成する3つの疑問文からは読者を議論に引き込もうと試みる語り手が浮かび上がってくるものの、一方「諸君らはそもそも何を騒ぎ立てているのか?」という語り口からは、読者を揶揄する姿勢も窺われるといえるだろう。

次に2番目の作品である『僭王が王位に就くとどうなるか』の冒頭部分を引

用する。

If the Danger of the Pretender is really so great as the Noise which some make about it seems to suppose, if the Hopes of his coming are so well grounded, as some of his Friends seem to boast, it behoves [sic] us who are to be the Subjects of the Approaching Revolution, which his Success must necessarily bring with it, to apply ourselves seriously to examine what our Part will be in the Play, that so we may prepare ourselves to act as becomes us, both with Respect to [the Government we are now under], and with Respect to [the Government we may be under], when the Success he promises himself shall (if ever it shall) answer his Expectation. (187) (emphasis added)

第1冊子とは全く異なる冒頭文となっている。第1冊子では、7語、16語、29語から成る3文を合計しても52語であり、第2冊子冒頭文の119語の半分にも満たない。しかも、単に文が長いだけの英文ではなく、文全体が緊密で、シメトリカルな構成となっている。まず、so, as, some, seems to を繰り返すことで、巧みに対を成す、二つの従属節である if 節が先行する。ここまでが文全体の3分の1弱であり、残りの3分の2を主文である it behoves ... to が受け、次に [the Government we ... under] を連続して用いながら、with respect to を二つ従える that ... may 節につなげる形をとっている。

さらに丸括弧を用いた '(if ever it shall)' という譲歩節を付加することにより、語り手は論じている対象を冷静に捉えているという印象を読者に与えるという効果も生じている。第1冊子の語り手が、自らの感情を表に出し、市井の人々の騒ぎを軽侮するタイプの語り手であるのに対し、第2冊子の語り手は、王位継承問題への冷静かつ論理的な対処を重視するタイプの語り手として設定されている。

最後に3番目の作品である『女王が死去されたらどうなるのか』の冒頭部分

を引用する。

That we are to have a Peace, or that the Peace is made, What sort of Peace (is made)¹³⁾, or How it has been brought about; these are Questions the World begins to have done with, they have been so much, so often, and to so little Purpose banded about, and tossed like a Shuttlecock, from one Party to another; the Parties themselves begin to want Breath to rail and throw Scandal. (209) (emphasis added)

冒頭文は70語¹⁴⁾ から成る。第1冊子の冒頭文7語、第2冊子の冒頭文119語と比較すると、文の長さは両者の中間に位置するが、それでもかなりの長文と言えるだろう。しかし第2冊子の冒頭文のような緻密な構成ではなく、2つのセミコロンによって、24語、34語、12語となる3つの部分を並べた形になっている。第1部分は4つの節を並べる形で構成され（但し3番目の疑問詞に導かれる名詞節は動詞が省略されている）、次の第2部分は、上の4つの節を主文の主語 *these* として引き継いでいる。最後の第3部分は、不定詞の名詞的用法等が用いられているが、それ程凝った文とは言えない。この冒頭部分は第1冊子と第2冊子の中間に位置する複雑さを持つといえるだろう。第3冊子の語り手は、王位継承問題に関する両派の遣り取りを、交互に行き交うバトミントンの羽根に喩えつつ、自らはその騒動から身を引いている。本作品の語り手は、英国を二分する論争を外から冷静に眺める語り手として設定されているのである。

冒頭部分を比較するだけでも、デフォーが3作品の語り手をそれぞれ全く異なるタイプとして設定していることが分かる。サザランドが指摘したように、特定の人物像を創り上げ、彼または彼女に「成りきって」(make-believe) 語るというデフォーの手法が3作品においても用いられているのだ。

IV

次に第1冊子について、設定された語り手の特徴に関してさらに詳しく見ていこう。(アイロニーの手法、デフォーによる歴史的事実の用い方については次稿以降で検討する。) まずは『王位継承に反対する理由』の冒頭部分を再度引用する。

What Strife is here among you all? And what a Noise about who shall or shall not be King, the Lord knows when? Is it not a strange thing we cannot be quiet with the Queen we have, but we must all fall into Confusion and Combustions about who shall come after? Why, pray folks, How old is the Queen, and when is she to Die, that here is this Pother made about it? I have heard wise People say the Queen is not Fifty Years Old, that she has no Distemper but the Gout, that is a Long-life Disease, which generally holds People out Twenty, or Thirty, or Forty years; and let it go how it will, the Queen may well enough linger out Twenty or Thirty years, and not be a Huge Old Wife neither. (167)
(emphasis added)

本稿のⅢで述べたように、第1冊子でデフォーが設定した語り手は、冒頭から4つの疑問文を読者に連続して投げ掛ける。1. 諸君らはそもそも「何を騒ぎ立てているのか?」、2. 騒ぎの内容は「次の王に誰になるのか」というものだが、「そもそも次の王位継承がいつ起きるのかは誰にも分からないのではないか?」、3. 今アン女王が英国を治めているのに、それに満足せず、次の王は誰になるのかと問うて「混乱と騒動」を引き起こすのは余りに「奇妙ではないのか?」、4. アン女王の今後の在位年数も分からないのに、一体どうして「このような大騒ぎ」をするのか? 語り手は以上のような問いを読者に投げ掛けている。

それでは以上のような第１冊子の冒頭部分から、どのようなタイプの語り手が浮き彫りになるであろうか。まず出来るだけ好意的に解釈するならば、平易な問いを重ねることで読者の注意を引きつけ、読者に続けてページを捲らせるような語り手として設定されているといえるだろう。

しかし上記引用の後半部分を読み、さらに作品を読み進めると、かなり特異な、問題含みの語り手であることが分かってくる。まず、語り手は高みから見下すように、この問題を議論する人々をからかっている。最近の大騒ぎには困ったものだという砕けた口調から、読者は語り手が人々に対して抱いている揶揄の念を感じ取るだろう。そして、国家の行く末を左右する重大事であるにもかかわらず、王位継承問題をぞんざいに扱う語り手に読者は軽薄さを感じる。

また引用後半の２番目や３番目の問いに多くの読者は違和感を抱かざるを得ない。語り手は「今アン女王が英国を治めているのに、それに満足せず、次の王は誰になるのかと問うて「混乱と騒動」を引き起こすのは余りに「奇妙ではないのか？」と述べており、表面上は正当なことを言っているように見える。しかし以下で述べるように、彼が語っている内容を具体的に考え、また彼が用いている英語表現に着目すると、語り手の発言の異様さが露わになってくる。

まずイタリック体で強調されている、「（次の王の即位）がいつになるのかは誰にもわからない」（*the Lord knows when?*）という箇所が具体的に意味しているのは、1713年当時、体調の優れなかったアン女王が亡くなることである。また「女王の年齢はいくつで、いつ彼女は死ぬのだろうか」（*How old is the Queen, and when is she to Die*）という表現からは、女王への敬意が全く感じられない。本稿のⅡで述べたように、本来ならば「崩御する」（*demise, pass away*）という表現を使うべきであろう。女王に対して用いている言葉が不適切であり、品位に欠けている例は他にもある。女王が罹っているのは「すぐには命取りにならない痛風」であるという箇所や、女王を「大柄な老妻」と比べつつ「おそらく未だ20年か30年は細々と命を繋ぐだろう」と述べている箇所を挙げることができる。

V

次に語り手は、英国内がプロテスタントのハノーヴァー選帝侯ジョージを支持する派と、カトリックの僭王ジェームズを支持する派に分かれている現状をからかっている。

Why, hark ye, you Folk that call yourselves Rational, and talk of having Souls, is this a Token of your having such things about you, or of thinking Rationally; if you have, pray what is it likely will become of you all? Why, the Strife is gotten into your Kitchens, your Parlours, your Shops, your Counting-houses, nay, into your very Beds. You Gentlefolks [sic], if you please to listen to your Cookmaids and Footmen in your Kitchens, you shall hear them scolding, and swearing, and scratching, and fighting among themselves; and when you think the Noise is about the Beef and the Pudding, the Dishwater, or the Kitchen-stuff, alas you are mistaken; the Feud is about the more mighty Affairs of the Government, and who is for the Protestant Succession, and who for the Pretender. (167-8) (emphasis added)

語り手は「耳を傾けよ」と読者に直接呼び掛けているが、この後の語り手の口調は、国難を憂う大真面目なものというよりは、諧謔味を帯びたものになっているといえる。「分別があり高潔な魂を備えていると言っていた諸君らは一体どうなってしまったのか」と語り手は続け、「台所、居間、商店、会計事務室」といったありとあらゆる場所で争いが起こっているが、諸君らは王位継承問題で騒ぎ過ぎなのではないかと語り手は茶化している。

軽妙ではあるものの、同時に揶揄も含まれる語り手の口調は、引用の中ほどの箇所、「争いは夫婦の隙間風さえ」引き起こしているのだという箇所ですらに強まっているといえる。（「夫婦の隙間風さえ」と婉曲に表わしたが、原文の

‘your very Beds’ はもっと即物的な表現である。）

争いが起きている最初の具体例として「台所」(Kitchens) が挙げられているように、最も卑近な場所でいろいろと騒動が起きていると述べられ、またその語り口に諧謔の調子が強く含まれるため、読者は事態の切迫さを感じない。本来の仕事を放り出して、多くの人が政治談議にかまけている姿を語り手が揶揄しているという印象を読者は抱くのである。

次稿以降の議論を先取りすることになるが、デフォーは上述のような大いに癖のある語り手を意図的に設定したと考えられる。デフォーが必要としたのは、冒頭部から読者を議論に引き込む語り手であると同時に、一方では、ある程度の嫌悪感や不信感をも読者に抱かせるような語り手であったのだ。というのも、デフォーが最終的に目論んでいることは、第１冊子を読み進んだ読者が、語り手の展開する議論が余りに馬鹿げていることに気づき、題名である「ハノーヴァー家の王位継承に反対する」という語り手の主張に強い疑いを抱くようになることだったからである。

最後に、デフォーが第１冊子の語り手に付与した特徴をまとめておこう。１．国をあげての「混乱と騒動」(Confusion and Combustions) は一体どうして起きているのかと呆れたように語り、重大事である王位継承問題を矮小化し、人々を見下す姿勢を語り手はとっている。２．語り手は大問題に対して斜に構えているだけでなく、アン女王に対して侮蔑的な表現を繰り返し用いており(具体例：when is she to Die, the Gout that is a Long-life Disease)、女王への敬意を甚だしく欠いている。３．女中や従僕が争っている中身は自分たちの仕事に関することではなく、王位継承問題という「もっと高尚な政治問題」(the more mighty Affairs of the Government) なのだという箇所から、語り手の風刺を利かせた姿勢が明らかとなっている。

(次稿へと続く)

注

- １）拙稿「ジャンルを超えた共通性（１）—デフォー作品における政治・歴史・文学—」『関

- 大英文学』（坂本武教授退職記念論文集刊行委員会，2015），103-115.
- 2) Daniel Defoe, *Constitutional Theory in The Works of Daniel Defoe*, ed. W. R. Owens and P. N. Furbank (London: Pickering & Chatto, 2000), 29-30.
- 3) 『平凡社世界大百科事典 CD-ROM 版』「ジャコバイト」の項.
- 4) James Sutherland, *Defoe* (London: Methuen, 1937), 193.
- 5) Maximillian E. Novak, *Daniel Defoe: Master of Fictions* (Oxford: Oxford University Press, 2003), 104.
- 6) *Defoe*, 192-3.
- 7) *Daniel Defoe: Master of Fictions*, 421.
- 8) Paula Backscheider, *Daniel Defoe: His Life* (Baltimore: Johns Hopkins University Press, 1989), 323.
- 9) *Daniel Defoe: Master of Fictions*, 422.
- 10) John Richetti, *The Life of Daniel Defoe: A Critical Biography* (Oxford: Blackwell, 2005), 135-6.
- 11) James Sutherland, *Defoe* (British Council and the National Book League, 1954), 11.
- 12) ① *Reasons against the Succession of the House of Hanover*, ② *And What if the Pretender should come?* ③ *An Answer to a Question that Nobody thinks of*. 上記3作品からの引用は以下の文献に拠り，引用文最後の丸括弧内に頁数を記す. *Constitutional Theory in The Works of Daniel Defoe*, 167.
- 13) ‘(is made)’ は筆者が付け加えた部分.
- 14) is と made の2語を引くと70語となる.